

過去に向かって生きた男

The Man Who Lived Backwards

チャールズ・F・ホール

佐藤正明 訳

消失

ニコライ・ロストフの事件は確かめられた事実からはじゅうぶん混乱させられるものであり、彼自身の話を考慮することが必要だった。彼の証言に関して、大衆は彼を現代のほら男爵と呼んで迎え、新聞記者はばかげた記事のための格好の機会ととらえ、科学者たちは虚言癖の精神病者だと決めつけた。

そこがあの小柄な男を不当に扱われたとわたくしが考える点なのだ。なぜなら、新聞は彼の話をもったく信じられない状況についての信じられない説明だとらえ、そうした場合につねにやるような書き立て方をした——つまり大笑いの種としてだ。大衆は朝食のコーヒーとペーコンをかきこみながら、論説委員たちの声高の言いつくろいを受入れ、ロンドンのペツカムからカムチャツカ半島まで響きわたるようなバカ笑いをはじめた。そしてもちろん、そのことは、まじめな調査をはじめようと考えていたかもしれない科学者たちを、おびえた馬のようにその事件そのものにかかずらわれないようにしてしまった。わたしは科学者ではないし——いずれにせよ物理学の専門ではないが、本職の精神分析医として二十年の経験があり、この件に命が

けでとりくむつもりだ。ロストフが自分の説明の一言一句が真実だと信じており、一連の驚くべき出来事すべてが実際に自分の身に起きたのだと信じていることについてだ。たとえほかの説明が出て来ようとも。

もしわたしたちが、ただのバカ笑いで終わらせるかわりに、既知の事実をふまえて彼の話を論理的かつ冷静に考えるために立ち止まれば、それは起こりえなかったと言っている既知の法則はないという、気がかりな考えにたどりつくだろう。ロストフは自分の話を証明することはできないと、あなたは主張するかもしれない。しかしあなたは少なくともそれに反証することはできない。

知られている事実から始めよう。事の始まりは（あるいは事の終わりと）言ってもいい。それを捉えるのにあなたがどちらを選ぶかだ。おおぜいの目撃者がいる。

ニコライ・ロストフは身長五フィート六インチの浅黒い肌の目立たない男で、ゲーリング・グラマースクールで物理学と化学を教えていた。英国に親族はいないが、友人がふたりいた。ひとりドイツ人のハンス・スカウテン。もうひとは同じグラマースクールの歴史の教師ハロルド・マシスン。この三人は共通の興味を持っていて、それが仕事以外の

時間に、彼らをゲーリングのはずれの荒地にある小屋に結びつけていた。

彼ら三人は最新の実験物理学に関心があり、粗末だがかなり設備の整った共同の研究室を所有していて、そこで元素の変換についてのラザフォード卿の実験のいくつかを再現し、拡張しようとしていた。

これに関連して、そのとき彼らは高周波・高電圧放電——ロストフの言葉によれば「百万ボルトでの小規模閃光」——の効果の研究をしていた。

一月二十日、火曜日の午後三時、ロストフはグラマースクールの三年生を担当していて、教室の教壇にいた。教卓からは離れていて全身が見えるように立っていた。その態度にも精神状態にもいつもと違うところがあるようには見えなかった。異常な何かがあるように、そうなる前はすこしもなかった。だが、あることを説明しようとして黒板を指し棒でたたいたとき、彼に何かが起こり、お行儀のいい無表情な顔をしていた生徒たちを驚かせた。もし彼が逆立ちして叫び声を上げたとしてもそれほどの驚きは見せなかっただろう。彼は消え失せたのだ。

音も、閃光も——何もなかった……ただ三十二人の目を丸くして口をぼかんとあけた

少年たちが空の教壇を見つめていた。

その出来事が生徒たちに与えた影響は、彼らが丸々三分間無言で座っていたことを述べるだけでじゅうぶんだろう。そのあと年かさの少年がひとりふたり周囲をさぐってみてから、けっきょく校長を呼びに行くことになる。しかし、教師と監督生の連合軍によるもっとも念入りの調査が明らかにしたのは、たったひとつのことだけだった。その科学の教官は一瞬のうちにゲーリング・グラマースクールから消えてしまったということだ。

三年生の子どもたちはその間にやつと声をあげられるようになり、この不思議な出来事について考えうるあらゆる角度から話し合った。だが、ほぼ一般的な見解を伴った唯一の説明は、ひとりの金髪の子どもが何気なくつぶやいた、悪魔が自分のものだって言ったんだよという言葉だった。

これら三十二人の目撃者すべてが催眠術にかかったのだという発言は、いささか常識のレベルを超えていた。そのうえ、教師たちは確実に催眠術にはかかっていなかったし、マシスンがこの件についてあとで話し合ったときに、わたしにこう打ち明けてくれた。「あの悪ガキたちを催眠術にかけることができると考えている者はだれも、ゲーリング・グラマ

ースクールで教えた経験がなかったのだ」

ロストフの話

ご承知のように、驚くべき木曜午後のロストフの姿がそれで見納めになったわけではない。彼が教室の教壇から消えたのときぴったり同じ瞬間に、あるいは確認しうるほぼ同時刻に、彼はミセス・ヴァン・ダー・ローヴィクの堂々たる屋敷の敷地内の空中から現れたのだ。そこは、グラマースクールからほぼ一マイル半離れていた。

細部を述べるならば、彼は衣類をまったく身につけていなかった。

この件における彼の出現の唯一の目撃者は庭師頭で、カールという名の単純な男だったが、そのおおよそ二分後にはカールの大声を聞いた郵便配達員が彼の姿を目にしていた。

何もない芝地の真ん中の空中から男が出現したのを目にするのは、神経にとつて決して鎮静剤にはならない。カールが芝地ごしに屋敷のほうをながめていて、たぶんベゴニアの手入れとか種の植え付けとかに思いをめぐらせていたちょうどその時——ひよい！ 全裸の男がいた。すこしふらつき、髪はぼさぼさ、目はぎらつき、白い肩には赤い傷跡があ

り、片腕は出血していた。

庭師の当然の驚きはロストフの最初の行動によつてさらに増した。奇妙な叫び声を上げながら走つてきたのだ。「ありがたい。止まっただぞ！ おまえはふつうに動いてる、ふつうに動いてる！」

狂人を相手にしなければならぬのかと思つたと、カールは正直に認めている。それで、あわてて鋤に手を伸ばし、同時に車道を去つていくのが見えた郵便配達員に声をかけた。しかしロストフはまったく敵意を示さず、ただ庭師と握手しながら支離滅裂にわめき続けた。カールは間近で見、この男が衰弱して疲れ果てていることに気づいた。二日分の無精ひげが頬をおおい、目は充血していた。

郵便配達員が来ると、カールはいくぶん分別を取り戻し、ロストフに掛けるために自分の上着を脱いだ。それからふたりで彼をドクターの家に入れて行つた。さいわいなことにそこまで二軒しか離れていなかった。その間にカールは怪訝そうな郵便配達員に、謎の男の突然の出現について出来る限り説明した。ふたりの意見が一致したのは、男は精神錯乱しているに違いないということだったが、出現の状況については説明できなかった。

ドクター・シーボームの見立てでは、ロス

トフが激しいショックと極度の身体的疲労に苦しんでいるということで、強壯剤を投与して、二三日入院するように手配してくれた。それが済んではじめて、医師はカールの言うことに耳をかし、ロストフのとりとめない話に耳を傾けた。

幸運にもシーボームと親交のあるゲイリング・ガーディアン紙の記者がその場について、特ダネをかぎつけたのだ。彼はすべてを書き取り、そしてロストフが救急車の中に消えるやいなやすみやかに行動に移した。その結果朝刊はすべての話を高らかに広めることとなった。だが、そのことがゲーリング・グラマースカールの事件と関係があることは、その日の夕刊が出て初めてわかった。

ロストフの驚くべき体験についてのこれらの最初の記事はきわめて不明瞭なもので、これを明瞭にするためにわたしは、最初の支離滅裂な記述でなく、ロストフがのちにありのままに真面目に話してくれた物語をここに書き留めることにする。それは彼がゲーリングのはずれにある研究室にいた一月二十二日木曜日の午後六時三十分から始まる。

大衆が息を吸つて最初の大爆笑を吐き出すのはこここのところだ。なぜなら、この物語が始まった水曜日の朝には、木曜日はまだ来て

いないのだから。それは未確定な未来のことだ。はじける泡よりも儚い夢であり、そのことで出だしから誠実な人間というロストフの評価を打ち砕くことになる。しかし、偏見を持たずに、彼が語つたとおりの物語に耳を傾けてほしい。

なぜなら、何の厄介な事件もなく自分のクラスを受け持っていたのは火曜日だと彼は断言したのだから。水曜日に彼は目を覚まし、ひげをそり、朝食をとり、通常の学校生活を過ごし、夜にはエリート・シネマで火事を目撃し、それからベッドに入った。そして同じように木曜日まで過ごした。彼がスカウテンとマシンと共同で使っている研究室にいた六時半の運命の瞬間までは。

ほかのふたりもそこにおり、メイン実験室で七時から行う放電の準備をしていた。スカウテンは職を持っているわけではなく三時からずっとそこにいて、接地板の上方四フィートのところに下がっている巨大な銅製コロンに充電している発電機の扱いに没頭していた。放電ギャップは通常の火花放電回路の装置とまったく同じ方法で動作するが、大きな面である改造を加えていた。発電機の起電力で充電されたコンデンサーと巨大な扁平あばら状の電磁誘導子、そしてギャップそれ自体

が回路の主要部分を構成していた。ギャップで絶縁破壊が生じる電圧は約百万ボルトで、閃光が起るとコンデンサーは空になり、高周波振動に同調して一秒間数千回の再充電を行った。

もうひとりのロストフ

ロストフはこう語った。木曜日の夕方、メイン実験室に隣接するこじんまりした部屋にいた。そこには短波ラジオの装置が置いてあった。ラジオに二十分ほど耳を傾けていた。だがひどい空電障害のせいでたいしたことは聞けなかった。その時になって、外では異常なほどの激しい雷雨が近づいていることに気づいた。この時季にしては珍しいことだったが、このところ温暖な気候が続きすぎていた。いずれにしてもラジオの受信はうまくいかないと見切りをつけ、腰をあげて隣室に行った。ヘッドホンをはずしてフックに掛けておこうと考え、そのためにソケットから端子を引き抜いたが、その時わざわざ柵のところに行かず、ヘッドホンを頭につけたままで、ぶら下がっているコードを肩に引っかけた。メイン実験室に入ったとき、すでにあたりが暗くなっていると知って驚き、嵐が思っ

いたよりずっと近づいていることに気づいた。計器を調べてみようととして放電ギャップのほうに歩いていった。スカウテンが陰極コーンに触らないようにと何か警告していたことを思い出した。だがもちろん、充電した装置に触ってはいけないことは、言われなくてもじゅうぶん承知していた。

主要電圧計を調べようとそちらに歩いていき、雲母カバーの背後で弱い明かりに照らされた電圧計を見るために、横向きに体を傾けて近くで目をこらさなければならなかった。コンデンサー内および放電ギャップ間の負荷はそのときおよそ八十五万ボルトだっただろう。

体がかがめたときに、ヘッドホンから垂れたコードのたるみが肩からすべって接地板に落ち、金属端子の先がむき出しの銅板の上に乗った。すぐさまスイッチを切ろうと手を伸ばしたが間に合わず、目のくらむような閃光が体を覆い、耳を聳するほどの轟音が響いた。おおむけに投げ出され、目がくらみ、茫然となった。最初に頭に浮かんだのは、何か思いもよらない方法で放電ギャップがショートして、感電死したのだということだったが、冷静に考えられるようになったとき気づいたのは、充電は閃光を発するにはじゅうぶんで

なく、とにかくスカウテンは回路を完結させるスイッチは入れていなかった。

つかのまのまばたきと、一瞬のひどいむかつきの感じが去ると、自分がまだ生きていたのだと気づいて驚いた。さらに驚いたことに、研究室はまったく被害を受けていないように見受けられた。放電ギャップはそこにあり、窓も装置もすべてそのまま、友人たちは実験台に向かっており……

いや。何かおかしい！ 着ていた服も、ヘッドホンも完全に消え失せていた。驚愕のあまり口をぽかんとあけて、全裸で、ぴかぴかした銅製コーンのそばに立ち尽くしていた。彼はわたしにこう話してくれた。しばらくのあいだ、田吾作のように目をぼちくりして、あんぐり口をあけてそこに立っているしかすることはなかった。なすすべもなく、まるで消え失せた服が空中にぶらさがっているかのようにあたりをきよるきよる見回した。そうしていると、気づいたことがあった。さきほどは気がつかなかった誰かが研究室の中にいるのだ。それは黒髪の小柄な男で、顔はほっそりして、地味なグレーのスーツを着て、ヘッドホンを付け、そのコードは肩からぶらんと下がっていた。

どこか見覚えがあると思ったのはほんの一

瞬で、以前その姿をどこで見たのか気づいて、ロストフは一撃をくらった。

自分自身を見ていたのだ！

ロストフが経験したようなショックやこころざしありえない事に直面したあと、ふつうの人間が多少精神錯乱を起こしても大目に見てもらえるかもしれない。突飛な推測がいくつか彼の頭をよぎった。その中で上位にあつたのは、夢を見ているか気が狂ったということのようだ——そうでなければ死んだということだ。わたしの考えでは、科学の素養だけが彼に正気を保たせたのだ。なぜなら、彼の脳は困惑で揺らいでいる間も無意識の観察と注視を行っていた。ショックで意識がまだ朦朧としていて正しく機能していなかったが、潜在する好奇心が彼を突き動かしていた。

最初に気づいたとき、グレーの服を着た人物は歩いていたら——後ろ向きに。フィルムを逆回しするかのように後ろにひよこひよこ歩いてドアのほうに向かい、そこを通った。ロストフは夢遊病者のようにそのあとを追った。もうひとりの自分は急に右を向き、無線室になつて狭い小部屋に入り、——さらに後ろ向きで——歩を進め、椅子のところまでいくとそこに座りこんだ。それからヘッドホンのコードをコンセントに差し込み、聞いてい

るように見えた。

ロストフはゆっくりとその人物に近づき、用心深く肩に触れ、それからもつとしっかりとつかみ、ゆすった——ゆすろうとした。というのには、力いっぱいやったにもかかわらず、座っている人物に対してすこしも効果をあげることができなかった。まるで御影石の彫像に触っているかのようだった。違ふのは、この像が疑いの余地なく生きていくということだ。上着の布ですら弾力がまったくなく、金剛石のように硬くて、触っても曲がらなかった。

ぐいと引つ張つても無駄で、話しかけ、男の耳元で大声を出した。何の反応もなかった。ロストフは座っている男の顔をじつと見た。疑いなく自分の顔だった。まるで鏡を覗き込んでいるかのようだ。何か信じられない方法で人格が交換されて、自分がほかのだれかの体に移されたのではないかという考えが浮かんで、激しい恐怖に襲われた。突然の理不尽な恐怖心から、壁に掛かった小さな鏡のほうに走った。見知らぬ顔がそこに映っているのを見るのが恐ろしかった。

目にしたものはあまりにも意外で、ぞつとするような衝撃をもたらした。何も映っていなかったのだ。

問題

見えたのは部屋の反対側の壁で、見たところすべてがふつうに並んでいた。だが、彼のほうを見ている顔はなかった。それは異様な身震いのする経験だった。好きなように首を伸ばしたり背伸びをしたりしたが、自分自身の体のひとかけらも鏡の中に見ることはできなかった。

目を下に向けた。自分の体があるのは、疑いの余地はなかった。片手を目の前にかざし、指を曲げた。どれもちゃんとそこにあると断言できた。ももをびしやりと叩くと、手のひらに痛みを感じ、肌には赤い跡がついているのを見た。

その瞬間、ロストフは子どものようになり、通常の経験からまったく外れた出来事に困惑し、おびえて途方にくれた。世の中のあらゆるものが突然ひどくうまくいかなかったように見え、自分のぐらつく正気を保つのに頼みの綱となる正しく正常なことを見つけたいと、切に望んだ。友人と話をしたり、健全な行動をする人間をまた見たりしたかった。メイン実験室に駆け戻った。スカウテンとマシンはひとつの実験台のところにはいた。

スカウテンに近づき、話しかけ、袖をひっぱった。友人もまた花崗岩のような恐ろしい硬さを有していることが分かって、恐怖の身震いが全身を貫いた。動く彫像に与える以上の影響をスカウテンに与えることはできなかった。

すぐさまマシンンのほうを向いた。この歴史教師も同じ状態だった。ロストフは半狂乱で彼の肋骨を殴り、痛みに悲鳴をあげた。まるで煉瓦の壁を叩いたかのように拳の皮がむけて擦りむいてしまったのだ。幽霊同様に実体がないという、吐き気をもよおすような無力な感覚が彼を襲った。

ふたりの友人を観察して、別のことが彼を打ちのめした。彼らの動きはすべて逆だった。マシンンは金属の角にやすりを掛けていたが、毎回金属に当って引くようにやすりを動かしており、いつぼう押すときの動きは宙に浮かしていた。何よりもおかしいのは、スカウテンが弓鋸で細長い金属片を切っているとき、ここでもまた、彼の鋸の動きがすべて間違っで見えたことだ。そして驚くべきことに切り口は金属の上で大きくなっていく代りに、小さくなっていき、先端に向かってどんどん縮まっていった。

ついに鋸刃が先端まで届き、引き上げられ

ると、無傷で手つかずの金属があとに残された。そのさまを彼はうつとりと見とれていた。突然スカウテンが後ろ向きに歩いてロストフに突進してきた。だが彼はたじろぎもせず、これっぽっちも進路をそらそうとしなかった。ロストフのほうに、蒸気機関車に激突されたかのように感じて、よろめきながらわきへよけ、床の上におさまに倒れた。

立ち上がると、友人の動きを観察した。彼はまじめくさって大腿で後ろ向きに歩き、工具棚のところまでいって弓鋸を掛けた。のちにロストフがわたしにこう話してくれた。

「そのときぼくはちよつとおかしくなっていたと思う。部屋のまんなか立って、叫び、声を限りに彼らに大声をあびせた。罵声を吐き、わめきちらし、嘆願し、祈り、両腕を天に向かつて振り上げた。ふざけるのはやめて、まともになってくれと頼んだ。だが、ぼくに思いもよらないようなどんなジョークを飛ばしているのか、さっぱり分からなかった。ちよつとの間、子どもみたいに泣きじゃくったんじゃないかな……」

前に言ったように、彼の中の生来の科学者がたぶん理性を保たせたのだ。しばらくして、落ち着くと眼前の問題に心を集中させた。問題。それだ！ ただ冷静さを保ち、観察し、

考えることができれば、何らかの説明がおのずとさしだされるかもしれない。すくなくとも自分はまだ生きており（そのことについては完全には確信していなかったが）、まだ推理することができるし、どうやら機転をきかせすることもできる。

この情勢下でマシンンは作業台を離れ部屋から出て行った。またも後ろ向きで。ロストフはそのあとを追って小さなキッチンに入っていた。そこにはコンロと洗い桶がおり、遅い食事の用意をすることもあった。マシンンは洗い桶の横にあるローラータオルのほうに行つて向きを変え、見たところ手を拭くしぐさをしていた。見守るうちに、流しから聞こえるごぼごぼいう音に注意をひかれた。

排水口から泡立った汚らしい水が湧き上がって、急速に流しを満たした。ロストフはこの現象に心を奪われていて、マシンンが流しのほうに来るとき、飛びのくひまがほとんどなかった。マシンンは栓を差し込み、石鹸皿から石鹸をとり、手を洗おうとしていた。

彼が洗い終えたとき、ロストフの目は驚きでまた見開かれた。水がまったくきれいで透き通っていたからだ。一方、マシンンの手は汚れていて、どうみても乾いていた。そして

彼が蛇口をひねると、水は突然上に向かう細い柱となって蛇口に吸い込まれはじめた。

ロストフはマシスンが研究室に戻って行くのは放っておき、水が蛇口に向かって噴き上がるこの驚異の現象に見入った。小さな水の噴出は根元のまわりに奇妙なはねをわずかに上げながら、揺らめく水柱となってまっすぐ蛇口へと吸い上げられていった。流しの水位はまたたくまに低下し、マシスンが戻って来たときには、一インチかそこらしか底には残っていないかった。最後の数滴が蛇口に吸い込まれたとき、彼はコックを締めた。もうそこには完全に乾いた空の流ししかなかった。

マシスンは研究室のドアのほうへ後ろ向きに歩いて行った。そのあとに付いて行ったとき、ロストフは何気なく時計に目をやった。無意識に時刻を心にとめ、それからまたあとを追っているときに、突然気づいてその場に立ちすくんだ。

もう一度時計を見た。間違いではない。針は六時十七分過ぎを指していた。だが無線室を出て、通りがけに時計に目をやったときは、六時半だった。

時を遡る

彼は石化したかのように立ちすくみ、時計を見つめた。神経をゆさぶる思いつきが一瞬のちらつきのように心をよぎったのは、その瞬間だった。それはあり得ることだ。だがこの常軌を逸した出来事すべてについての説明としては狂気じみていた。椅子に沈み込み、なんとか筋の通った考えをしようとした。

あのわけのわからない閃光が起きたとき、自分の時間感覚がどうかして逆転し——いまのように後ろから前に進むようになったというのは、あり得ることだろうか？ 別の言い方をすれば、ふつうとはまったく逆の方向に流れている時間流の中に放り込まれたのだろうか？

もちろん、お分かりでしょうが、その時点でロストフは放電ギャップのそばに立ったとき何が起きたのかさっぱり分かっておらず、ある種の放電が起こったのではないかとどう思う感づいているにすぎなかった。だが、考えれば考えるほど、そうした信じられない時間間の逆行だけが、自分をこんなに困惑させている現象を説明できるといふ可能性が増してきたように思えた。

もし自分が時間の中で着実に逆向きに進んでいるのであれば、そのときは、外部活動の驚くべき逆転現象がもつと理解しやすくなる。

後ろ向きに歩いている友人たちがその一例だ。上向きに流れる水のこと。自分自身を見ることのできることも。自分は過去を目撃しているだけなのだ。フィルムを逆回しで見ているようなものだ。だが目撃している以上のことがあった——過去の中で生きており、時と共に過去の中にどんどん引き込まれていた。

もういちど時計を見た。すでに四十五分も通常の時間の世界から切り離されていた。ぞつとするほどの状況に捉えられていることで汗ばんできた。四十五分はふつうの生活では長いものではないが、いまの自分には永遠に匹敵した。もう二度と友人たちやほかの誰とも談話を交わすことはない、二度とまともな理解できる世界を見ることははない、そう運命づけられているようだった。

そこに座して思い描いてみた。全裸で、無防備で、冷静になって狂気に駆り立てようとする状況に理性的に取り組もうと奮闘する自分の姿を。信じられない孤独を想像した。過去の世界に広がる霧のかかったぼんやりした将来に向かって突き進んで行く、ちっぽけな人間の姿を。いっぽうでは、友情や安全や快適に代表されるあらゆることが刻一刻と反対方向に飛び去って行き……

険しい顔つきでそのイメージを心から引き

はがし、問題の科学的側面に心を集中した。

これまでに経験した外界の物質のびくともしない堅さを、しばらくのあいだ理解することができなかった。過去をふたたび見ているのであるから、それらの物はむしろ夢のように実体のない儚さがあつて当然のように思えた。だがちよつと考へて、論理的な回答に達した。

過去というのは明確に限定され、形が定まり、変更しえないものだ。万物の中ですべてがそうであるように。それゆへ、それに少しは影響が与えられると主張したり、ここにありものを動かしたり変えたりすることができると主張したりすることは、世界とか宇宙の全歴史を変えることができることと主張することになる。まわりに見えるあらゆることはすでに起こつたことであり、決して変えることはできないのだ。いっぽう彼は、未来はまだ前方にあるのだから、たとえそれが逆向きだとしても、流動的であり、可動性があり、可変的なのだ。彼は侵入者であり、異例なのだ。彼自身と過去との間にいかなる衝突があつても、そのときはいつも、過去が抗しがたいものであることを立証するだろう。

友人たちが彼の叫び声を聞くことができないのは当然なのだ。パンチを感じることもできないのは当然なのだ。実在しない幻獣キメ

ラに過ぎないのだ。

唇をかみ、眉をひそめて時計を見つめながら、一時間ものあいだ座つていた。あらゆる種類のおかしな影響があることだろう。人びとの行く手から身をかわし続けなければならぬ、頭を叩き割られる危険を冒さなければならぬ。もしたまたまハエやミツバチがスピードを出して飛んできた通り道に入り込んだら、弾丸以上に確実に彼を貫いて穴をあけることだろう。太陽は、彼にとつては、東に沈んで西から昇るだろう。木々や草花は下に向かつて生育してゆき、やがて土の中に潜つて種になるだろう。その種は空中に飛び散るか鳥に運ばれて親の木にたどりつくだろう。花に芽に姿を変え、その先には逆向きのあらゆる果てしないサイクルがあり……ついに彼は氣力を振り絞つて、出入口のほうに歩いていった。彼にとつて都合なことにドアは少し開いており、かろうじて通り抜けられた。スカウテンが三時に出て行くときに閉じ込められたくはなかつた。

研究室が立っている地域はにぎやかな場所ではなかつた。そしてほどなく気づいたのは、それが往來の激しい大通りを避けるには最適だということだ。前に向かつて動くことに世界がどれだけ頼っているか、逆行という

のがふつうの生活の中でどれだけ珍しいかということに、いままで気づいたことがなかつた。自動車が突然角をひゅつと曲がつて後ろ向きに走ってくるのを見るのは驚くべき経験だつた。ハトがせわしなく羽ばたきながら尾羽を前にして地面から飛び立つところを見るのも、そして過去にカラスの翼から落ちた黒い羽が空中に浮き上がり、そのカラスがもつたいぶつて後ろ向きに飛ぶときに、真っ黒い羽毛の中にきちんと収まるのを見るのも驚くべき経験だつた。

人びとの動きを前もつて判断するのはほとんど不可能だと分かつた。直観的な予測はことごとくくつがえされた。ショーウィンドーを覗き込んでいた人が何の前ぶれもなくバックして、大股にロストフのほうに歩いてくることになるだろう。そうしたらあわてて飛びのかなければならない。道に落ちていたボールが突然動き出し、ころがつたりはずんだりしてから、飛び上がつて彼の頭を飛び越し、まえにそれを投げたいたずら小僧の手の中に収まることになるだろう。しばらくすると、近くにあつて動くかもしれない物には何でも油断なく目を凝らすことを学んだ。だが、学ぶ過程は心身ともに痛みを伴う作業であり、多くの打撲傷と身震いをもたらした。

運命づけられて

木曜日の間ずっと、午後が午前へと近づき、太陽が南に上がって弧を描いて東に落ちていくまで、ロストフはあてもなくさまよった。自分を取り巻く前例のない新規の出来事が科学者魂に訴えかけてきて、自身の窮状についてはほとんど忘れられていた。自分がおかれている状況がいつか正常に戻るだろう信じる理由があるとは思えなかった。だが、残りの人生を、びくともしない過去の情景の中で、無力の幽霊として送るという見通しは快いものではなかった。

しかし午前中の中頃までには、この状況でどう過ごしていこうかと思ひ悩むことは無駄だと分かった。なぜなら、それより前にするべきことに気づいたのだ。奇跡でも起こらない限り数日中に自分は飢餓と渇きで死んでいくだろう。

飢えの苦しみに追い立てられてコーヒースタンドからサンドイッチをちよつと失敬しようとするまで、その自覚はわいてこなかった。どんなに力を入れてもパンくずすら持ち上げることができなかった。頭を下げてサンドイッチを噛みちぎろうとしたが、コンクリート

板を噛もうとするようなものだった。コーヒーカップを持ち上げようとしてみたが、岩のように動かなかつた。やみくもになり、カップに指を突っ込んでその液体を少しでもすくい上げようとした。その表面にさざ波すら立てることもできなかった。茶色いガラスのブロックをひっかくようなものだった。

落胆してそこに立ち尽くした。もちろんそれは予測されたことにすぎなかった。どのみち、たとえ食べ物をおとかけなるとか飲み込めたとしても、消化することはできないし、もしその場を立ち去れば、体に穴をあけるだけだろう。必然的にその物の本来の位置にしっかりと留まるのだから。

不思議なことに、自分が運命づけられた人間であるという認識ですっかり気落ちしてしまふようなことはなかった。彼にあびせかけられた数々の冗談にもかかわらず、その取るに足らない下つ端の学校教師には真に偉大な人格の素質があるとわたしは考えている。彼のオデッセイは、いかなるユリシーズが夢見たよりも異質なものであり、それでも知識に対する渴望、すなわち重大な実験に取り組む先駆者の知的な関心が、彼に緩慢で孤独な死の恐怖を乗り越えさせたのだ。

ひとりの労働者が後ろ向きにコーヒースタ

ンドまで歩いてきて、振り向き、空のカップを持ち上げ、それを口まで運び、しばらくして湯気のたつたコーヒーのカップを下に置いたとき、その一連の動きを見た彼は苦笑さえ浮かべた。男は顎をむしやむしやと動かして一口のサンドイッチを口から出した。それを続けて数分のうちに、男の前の皿の上には完全な手つかずのサンドイッチが現われた。そしてコーヒースタンドの店主からコインを受け取ってポケットにしまうと、後ろ向きにすたすたと立ち去った。

ロストフは二、三秒のあいだ、湯気が薄い空気の中から現われて大きなコーヒー沸かし器の注ぎ口へと流れ込むのを見とれていたが、彼もまた先へと進んだ。

ようやく早朝の薄闇がおとずれたとき、どこか眠る場所を見つけなくてはと考え始めた。だがその晩はほとんど眠ることはできなかった。すぐに悟つたのだ。横になれるような柔らかいものが見つかる見込みなどないことを。馬小屋の干し草の山にそそられたが、それはびくともしない尖つた髪の毛のように細い針金の上に横たわるようなものだった。

水曜日の夜の大半は悲嘆にくれて無人の通りをさまよい歩いたが、やがて疲労のあまり、戸口の階段に腰をおろしてドアに背をもたせ

ることになった。そこは堅かったとしても、少なくとも滑らかだった。あえて眠らないようにした。だれかがドアから出入りするようなことがあったときに自分が眠っていることを恐れたのだ。だが水曜日の晩が近づいたころ、一時間ほど不安なまじろみにおちいった。

教会の塔から十時の鐘が鳴ると目覚め、だるそうに立ち上がって歩き出した。水曜日の夜、人びとはまだ出歩いていて、それで、これ以上眠るのは安全でないと思つた。歩きながら無精ひげのはえた顎をなでた。

お気づきと思うが、彼の体の新陳代謝はまだ正常に働いていた。頭髮はまだ伸びており、体は疲労し、食べ物を必要とし、血液は絶えず間なく血管をめぐるっており、心臓は規則正しく鼓動していた。そのことは、彼がなぜ火曜日から木曜日までの出来事の流れと、火曜日に戻つたあとの出来事の流れをすべて覚えていられたかを説明している。彼の身体的自己が関係している限り、それはひとつの途切れない時間のつながりなのだ。

水曜日の間中、にぎやかな大通りを避けながら田園地帯に向かって先へ先へと突き進んだ。空腹と極度の疲労で気が遠くなつてきており、反射神経は危険信号に対する反応が遅くなつていた。危機一髪目の目に、二回あつ

たことで、それは証明された。

一度、ネコが低い塀に向かって後ろ向きにゆっくりと歩いているところに出くわしたことがあった。何も考えずにネコと塀の間に割り込もうとした。しかしながらネコに追いついたとき、ネコはうづくまると突然塀の上に向かってしっぽのほうから宙に飛び上がった。ロストフが身をかわすには速さはじゅうぶんでなかった。ネコは肩をかすめる一撃を彼に加え、十メートルも突き飛ばして、腕の皮膚が擦りむけて血を流すほどの深手を与えた。そのことがあつてから、もつと慎重に歩こうと意気込んだが、その気づかいにもかかわらず、その朝あやうく被害にあいそうになった。

死を待つて

水曜日の午前中はどんよりした天気で、頭上には灰色の雲が低く垂れこめていた。十一時ごろ、道路一面に点々と奇妙な水濡れがあることに気づいた。時とともにこの水濡れは合一し、広がつていった。九時までには何か水かガラスの薄いシートのようなものが道を覆うようになり、茶色い水があちこちの下水溝や排水路から湧き出てきた。

ロストフは意外にもなかなかこの意味がつか

めなかつた。そうするうちに路面から銀色の線のようなものが噴出してくるのを目にした。その奇妙な線はあちらにひとつ、こちらにひとつと現われた。ようやく差し迫つた危険の真相と戦慄が胸を射貫き、幸い近くにあつた屋根付きの通路に跳び込んだ。

五分以内に、これまでに見た中でもっとも不思議なにわか雨を見つめることになった。雨粒が必殺の銀の弾丸のように電光の速さで地面から噴出して上空へと消えていく雨なのだ。道路の水溜まりは無数の小さな流れに分かれてあらゆる方向に広がり、最後には散り散りになつて小さな水滴となり、上空の雲に向かって飛び上がつてゆくのだつた。もしその奇妙な豪雨にまともにつかまっていたら、体はほんの数秒でずたにされていたことだろう。

二十分ほどたつと雨足は弱まり、やがて濡れた場所の間にぽつぽつと乾いた箇所を見ることができた。次第に乾いた箇所はつながつて広くなつていき、雨で濡れた染みのほうは少なくなつて、ついにはその最後がぽつと飛び去つて見えなくなり、あとにはからからに乾いた道路だけが残つた。

ロストフは辺りな道路や細道を縁取る雑草によつてかなり行く手を阻まれ、車道を歩く

ことになった。草が刈り込んであるところではその上を歩くことができた。たとえびっしり並んだ釘の上を歩いているような感じだとしても平気だった。だが草が長く伸びているところでは、薄いガラスの破片のように草が足を切り裂いた。

それゆえ、火曜日の夜が近づくころになると、町に戻って、眠るために人がめつたに通らない場所を見つけようか、それとも農場が見つかる望みをかけてさらに前進しようか、決めかねていた。だが、木々に囲まれた敷地の中に立っている大きな屋敷を見て、そこで試してみることに決めた。みじめなほどに疲労を感じていたのだ。

曲がりくねった車道に沿って歩き、横になれそうな滑らかな場所を探し回った。開いた窓の前を通ったとき、不気味で耳障りな雑音にびっくりさせられた。最初それが何なのか分からなかったが、窓から中を覗くとテーブルの上の蓄音機が目にとまった。音楽が逆向きに演奏されるのを聞いたのは、それが初めてだった。どんなに努力してもそれが何のメロディか突き止めることはできなかった。

もちろん音声はいまでも聞き取れたが、ほかのもろもろの事と同じように、それは逆向きに聞こえたし、たいていは内容を認識する

ことができなかった。まわりの人たちの唇から喋る声は聞こえてくるが、まるでちんぷんかんぷんだった。一方、鳥たちのさえずりは支離滅裂な鳴き声に変わっていた。車のクラクションさえ違っていた。汽笛とか馬のひづめの音とかの調子の変わらない音だけが、聞きなれたものだった。

屋敷の玄関に張り出た平らなポーチの上で横になって夜を過ごしたが、火曜日の夜半まで眠りは訪れなかった。体の節々まで痛んだし、屋根の上は恐ろしく堅いような気がしたが、幸いにも寒くはなかった。彼の体験を通じてずっと、温度変化はまったく感じなかった。

太陽がすでに逆側から空に上がってきているときに目覚めたが、動くのがいやで長いこと横になっていた。初めて、完全な絶望が暗い氾濫となって押し寄せた。二日二晩何も食べておらず、肩はこわばり、絶え間なく震えた。傷口の出血を止めるものは何も持っていなかった。失血は飢餓や疲労と相まって体力と気力の減退を実感させた。

歩き回り続けるために気負い立つても意味がないように思えた。なぜなら、遅かれ早かれ死が訪れて、絶え間ない鈍痛に終わりをもたらしてくれるのだから。死んだら自分の体

は通常の状態に戻るのだろうかとぼんやり考えた。それとも過去という広大な霊廟の中へ、引き続き運ばれてゆくのだろうか……？

夕方近くに、ゆっくりぎくしゃくとポーチから這い下りた。しばらくの間、屋敷のまわりをぶらぶらした。裏手でキッチンドアが開いており、テーブルの上に焼き立てのケーキが一皿置いてあるのを目にして、ひとかけ失敬してみたくなった。もちろんそれは無駄なことであり、ケーキにこすり跡でも付けようと努力してこぶしをすりむいたあと、それを見ないように、また屋外に出た。

もう一度道路に出るつもりで屋敷の正面に回り、広い芝地の縁沿いに歩いているとき、何かが彼の注意を引いた。茶色い小鳥が後ろ向きに芝地を横切って飛んでいた。地面から五フィートほどの高さだ。だが奇妙に見えたのはこのことではなかった。いつもふつうの鳥が飛んでいるよりもずっとゆっくり、この鳥が飛んでいるという事実だった。

これまで、周囲の動きはたとえ逆向きだろうと、すべて変わることなくふつうのスピードだった。だがこの鳥はスローモーション・フィルムに映っているものようだった。ただ後ろ向きに漂っていた。それで羽ばたきを数えることができた。興味をもってそれを見

守った。そして鳥が芝地の中央付近に達したとき、彼は驚きのあまり目を見開いた。空中で止まったのだ！

すぐさま、そちらに駆け寄った。そここの地面から五フィートのところで、茶色い小鳥はまるで見えないワイヤで吊られているかのよう浮いており、精緻に彫られた小さな彫像のように固まっていた。鳥のまわりすべてに手を通し、下も上も試して、最後に鳥をつかんだ。それは壊れそうな堅さで、まったく動かせず、ほかのすべての物がこの異質の時間流の中でそうであるのとまったく同じだった。

正常に戻る

ぞっとするような恐怖とともに、突然気づいた。全世界が明らかに静かになっているようだったのだ。広大な静寂が周囲すべてを覆っていた。鳥のかすかなさえずりも、小枝のかさかさという音も、どこかでカチツとかコツコツとか鳴る音も聞こえなかった。彼はまるで何か別の悪夢に見舞われないように身動きするのを怖がっているかのごとく、身じろぎもしなかった。

ゆっくり頭をめぐらせて、すべての動きも止まっているようだと思つた。道を縁取る

植え込みに身をかがめていた庭師は片手をなかに伸ばしたまま、変な姿勢でうずくまっていた。そよ風に吹かれた枝々はちよつと先を下げて左右に揺れた状態で止まっていた。煙突からのぼる薄い煙は青ガラスの噴霧のように空中で釣り合いを保っていた。地球全体が息を止めているかのようにだった。

それから言語に絶する緊張で体が一瞬ぐいと引つ張られ、めまいがしそうなむかつきの衝撃に見舞われた。全身がばらばらに引き裂かれたようになり、それでも身動きしたり声を上げたりできなかった。ほんの一瞬、全身を包む暗闇があった。次いで、その緊張の糸が、輪ゴムが外れるようにぶつ切り切れた。すこしばかりよろめいており、目だけが見開かれていた。

あの茶色の小鳥は茂みに向かつて飛び去っていった——前向きに羽ばたきながら！ 庭師は驚きのあまり滑稽な表情を浮かべて、彼を見詰めるが立ち尽くしていた。希望の激しい興奮が突然湧きあがる中、ロストフはその男が自分を見ることができると分かった。彼はわけのわからないことを口走りながら飛び出した。

次の瞬間、びっくり仰天しているカール氏の手をとって握手していた。笑いながら、そ

して同時に涙を流しながら……

さて、以上がロストフ自身が語った物語だ。そしてこの事件の主要な顛末だ。だが、あとひとつふたつ、証拠あるいは偶然の一致と呼べる事実がある。どちらを取るかはあなた次第だ。

ロストフの言では、水曜日の夜、ハイゲートのエリート・シネマに集まっている人だけに興味をひかれたそうだ。人だかりの外側にいたのであまり見通せなかったが、少なくとも消防士たちが三階のバルコニーから突入するところと、夜の風に乗ってもうもうと巻き上がる濃い黒煙を見たという。彼の記事は水曜日の朝刊に載り、その同じ日の夕方六時にエリート・シネマは火事になり、消防隊が出動している。

もちろんロストフはそこにいなかった。彼は入院しており、静かに眠っていた。だが、ちょうどその夜に火事が起こるだろうと彼が言い当てた——あるいは夢に見た——としたら、それは偶然の一致だ。

さらに、これをどう解釈するだろうか？ スカウテンとマシソンは当然、病院にロストフを見舞いに行った。彼らは研究室で実験作業を続けていて、仕事の進具合を彼に知らせた。水曜日の夜、彼らふたりがメーン実験

室で仕事をしていたとき、いつもとは異なる激しい雷雨が南から近づいてきた。この季節としては珍しかったが、前例のないことではなかった。

一、二回あちこちで稲妻が光った。そして正確に午後六時三十一分、明るい閃光が屋根を直撃し、巨大な銅製の放電ギャップを通してアースに流れた。そのギャップはある程度充電されていて、七時には絶縁破壊が起こることになっていた。上側のコーンはひどく溶けており、接地板はゆがんで溶解し、周辺装置の大半は溶解したり焼けたりしていた。

不可解なことに、電光があつたすぐあとに、彼らは放電ギャップのそばでひどく焼け焦げたグレーのスーツ一揃いと、下着、ブーツ、靴下を見つけた。それらといっしょにゆがんだ物体があつたが、最初それが何だか見分けがつかなかった。しかしながらあとになつてヘッドホンの残骸だと判別がついた。だがどうやってヘッドホンやスーツなどがそこに持つてこられたのか、ふたりは説明することができなかった。

わたし自身の頭の中ではこう納得している。最初、ロストフは火曜日から木曜日までを実際に過ごしたのだ。自分のクラスを受け持ち、どの点からみてもふつうの人間と同じように

ふるまっていた。そしてあの木曜日の夜になつて逆向きの時間流の中に捻り飛ばされ、いわば自分自身の轍の上を戻りはじめたのだ。こうして、以前に存在した自分自身を眺めるという、己の過去の無力な傍観者となるのだ。

しかし、進行がゆるやかに止まり、火曜日の午前三時に通常の時間流の中に解き放たれたとき、明かな不調和が直ちに現われる。同時存在するふたりのロストフがいることになるのだ！ そうなつたかもしれない。つまり、人が二つの場所と同じ時間に存在できないと明言する不変の法則がないならば。

だが、彼が通常の時間流に戻り、ミセス・ヴァン・ダー・ローヴィクの芝地の上に出現した瞬間、以前の《火曜日く木曜日》の存在は自動的に無効となつて抹消され、前からいなかったかのように消え失せた。そのことが、グラマースクールからの驚くべき失踪を説明している。《火曜日く木曜日》時間の旅をやり直さなければならなかつた——だが今回は病棟から。けれども彼の新陳代謝と物理的作用はこの冒険の間ずっと変わらなかつたので、以前の自分の存在のことをそのまま覚えていくことができた。たとえそれがほかの人の記憶の中にはもはや存在していないとしても。

彼の推移のメカニズムについて、わたしに言えることはほとんどない。それは以前に言ったように、わたしが物理学者でないからだ。可能性として言えるのは、稲妻の電光が彼に一撃を与えたか、あるいは主要な力はヘッドホンを通して転送されたか。その結果、ロストフは通常の時間流から捻り飛ばされたのか。放電ギャップの存在が効果をもたらしたのかどうかは分からない。確かに、電光の奇妙な効果は説明が難しいとずっと言われてきている。

これは奇妙な事例だ。だがわたしはこれを特殊なことではないと思いたい。これまでに説明のつかない失踪はたくさんあつた。また、本物だと証明されているいくつかの実例では、裸の人間が突然どこからともなく出現しており、どこから来たのか、何者なのか、理路整然とした説明ができないのだ。

とにかく、あなたはロストフの物語を聞いて、このとても不思議な出来事の最有力の説明に関して、あなた自身の意見を整理するかもしれない。でも、こう訊きたくなるかもしれない。ロストフ自身はこのこと全体についてどう考えているのだ？

わたしにはこうお伝えすることしかできない。ニコライ・ロストフはノーマン・ロビン

スンと改名し、口ひげを生やし、べつこう眼鏡を掛けている。彼はある工業都市に働きに行っているが、その地名は明かさないと言束したし、その町では彼は知られていない。ロストフは忘れようとしているのだ。

【訳者あとがき】

C・S・ルイスの幻想小説『天国と地獄の離婚』*The Great Divorce—A Dream* (1946)の巻頭に以下のような著者のはしがきがある。

あるアメリカのいわゆるSF雑誌の作者に対して、私は感謝の意を表明しなければならぬ。その作者の名はおぼえていないが、すごく色彩のきらびやかなアメリカの雑誌に出ていたものを、数年前に私は読んだのであった。私はこの本に出てる天国の物質が、曲げることも折ることもできない固さを持っているのは、じつは、その作者から受けた示唆によることなのである。もっとも彼はその空想を、私とはちがった、はなはだ独創的な目的に使っていたのだが。彼の物語の主人公は過去の世界にはいつて行く。そこでは、きわめて適切なことに、まるい雨滴が彼の身体を弾丸のようにつらぬき、

サンドウィッチは、どんなに力をこめてもこれを噛むことができない——それは、言つてもなく、過去に属するものは何ひとつ変更しえないからだ。私は、その作者ほどの独創性はないが、望むらくは同等の適切さをもって、これを永遠の世界に移してみたのである。万一、右の物語の作者がこの小文を読まれることがあるなら、私の謝意を受け入れていただきたいと願うものである。

(柳生直行訳、みくに書店、一九六六)

ここで挙げている物語が、ここに訳出したチャールズ・F・ホルルの短編「過去に向かつて生きた男」であることが、のちの研究者の調査で分っている。C・S・ルイスが「アメリカのいわゆるSF雑誌」といつているのは勘違いで、英国最初の大人向けSF雑誌 *Tales of Wonder* である。マイク・アシユリ一著『SF雑誌の歴史 パルプマガジンの饗宴』(牧眞司訳、東京創元社)によれば、この雑誌は一九三七年創刊で、一九四二年までに十六号発行されており、第五号(一九三八年冬季号)ではアーサー・C・クラークが「人類の未来帝国」という記事でプロ・デビュウしている。その第三号(一九三八年夏季号)に載ったのがこの短編である。この作品は二

〇〇八年にダグラス・A・アンダーソン編のアンソロジー *Tales Before Narria: The Roots of Modern Fantasy and Science Fiction* に収載されている。作者ホルルの素性は不明で、短編三作が残されているのみである。二〇一七年にはこの三編をまとめた小冊子 *The Man Who Lived Backwards and Other Stories* (Noden Books) が出版された。

「過去に向かつて生きる」というアイデアはクリスファー・ノーラン監督の映画『インセプション』(二〇一〇)でも使われているが、最初に使ったのはルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』(二八七二)である。アリスが出会った白のクイーンは、時間軸を未来方向にも過去方向にも進むことができる。アリスはクイーンが過去に向かつて生きているときに出会ったので、クイーンはまず絆創膏と包帯を指に巻き、それから指から血を流して叫んだのちにピンで指を刺す。出来事が逆の順序で起きているように、アリスには見えたのだ。このアリスのエピソードはロバート・ネイサンの『ジェニーの肖像』(一九三九)でも画家のイーベンがジェニーをモデルに絵を描いているときに話題になっている。ホルルはこの短編を書くに当たってアリスのエピソードからヒントを得ているのかもしれない。